

J. C. オーツの The Wheel of Love 研究 ()

長岡成幸

An Interpretative Study of J. C. Oates' s The Wheel of Love ()

Shigeyuki NAGAOKA

In this interpretative study of Joyce Carol Oates' s "Unmailed, Unwritten Letters" in The Wheel of Love (1970), the theme of love, style and structure of the story are discussed in detail. As to the form of love, adultery and its tragic conclusion are also the central theme here. Her love is doomed considering the lonely situation of her life. The first-person narrative of a married woman in the letters, the story, is effective in the expression of distress and struggle of her mind. The letters themselves are an interior monologue, the expression of her mind. And the disorderly arrangement of the letters also contributes to express her anxiety and the strained situation of the story. This lonely woman is ready to accept everything every conclusion, every torture, and pay the price of her adultery at the end of the story. Similar tragedies of love in The Wheel were discussed in the previous study.¹ In the last stage of this series of interpretative studies, the central theme and structure of The Wheel of Love will be discussed as a whole.

1. はじめに

ジョイス・キャロル・オーツの短編集 The Wheel of Love (1970)² に収録されている作品 "Unmailed, Unwritten Letters" を考察する。愛の問題を中心として、作品の構成、技法を考察し、この作品の愛の諸相とはどのようなものかを見てみよう。この作品集が再び「恋愛小説集」ではなく、「愛」についての物語集であることが分かる。オーツの場合、言うまでも無く、愛の成就ではなく、成就せぬ恋、愛の芽生えと同時に、時には暴力を伴う悲しい別れである。この物語でもまた人生におけるこの性とも言うべき辛く、そして寂しい男女の側面を垣間見る。

2. 作品の構成

この「投函されない、心の手紙」とも言うべきこの作品は物語全体が主人公「私」の愛の苦悩、心情の吐露の物語である。そしてその表現形式は手紙の形式をとってはいるが、夫への告白さえも直接語るのではなく、内面心理、心の葛藤を吐露する手段としての手紙である。つまり、物語全てが一人称で語られ、「私はこのように思い、悩み苦しんでいるのだ。」という物語であることは題名からも推測されよう。「私」とは夫がいて、子供がいない家庭の妻であり、現在妻子ある男性を愛している女である。

物語は、先ずは、遠くへ旅をしている父母へ宛てた普通の近況報告で始まり、恋する相手の娘への挑戦、そして自分の家の早朝の様子などが語られる。夫が庭に散歩

に出るのを感じながら、何も知らない夫に不義を働いている自分の身の上に思いを巡らす。この後、特に何の脈絡、時間的経過もあまり関係なく、周囲の者へ「手紙」を書く。両親へ3通、夫グレッグへ4通、愛する相手の小賢しい娘マーシャ・カッツへ2通、愛する相手へ3通、相手の妻カッツ婦人へ1通、編集者へ1通と合計14通の心の手紙を書いた形式になっている。作品全体は25ページであるが、そのうち夫へは12ページ程で、およそ半分が割かれている。

物語に時間的脈絡はないが、最後は夫への長い告白と相手への一行の別れの言葉で終わる。即ち、この半年か、数ヶ月程度彼との関係が続いたことを暗示させた後、相手との関係がさらに親密になり、もう夫に隠しておくわけにはいかない切羽詰った状況にある。その主人公が精神的に深い苦悩の淵にあり、彼と別れまでの1, 2ヶ月間の時間的経過の中で物語は構成されている。

物語は苦悩の中で終局へ向かう訳であるが、主人公は夫に告白すること意外何も考えていない。別れようとも、許してもらおうとも、彼と今後どうなるかも考えていないが、自分に課せられるものは全て受け入れるつもりでいる。愛する彼が戻ってくるかもしれないという一抹の望みも含めてである。ただ、彼の娘の仕業によりほぼ彼は戻って来ないと確信しつつある。彼が一番弱い弱点を突かれ、主人公が心配していた結末を迎える。

3. 出会い

主人公「私」と夫はお互いにそれ程熱烈な恋愛をして一緒になったわけではなく、お互いに大学院生の

時 "fearful of love, and fearful of not loving, of not being loved, So we met." (p. 58) とあるように、あまり深刻にも考えずに結ばれた。状況から、二人は妥協の産物のように結びついたと言っては言い過ぎだろうが、これ以外に夫との出会いには触れないのでほぼそのような状況にある。そして、結婚して8年間子供もいないし、夫は市長の秘書として仕事中心の生活を送っている。仕事に充実感を見出しているようで、帰宅すると嬉々として、仕事のことを直ぐ話題にする。それを妻は楽しそうに聞いていると彼は思い違いをしている。そのような状況の下で他の男性との出会いが生まれる。次の引用は恋人ができてしまった後の場面であるが、ここにその不倫の苦悩と自分が夫との間に本来抱えている現実の苦悩とが綯交ぜになって表現されている。この主人公の苦悩する内面の心理描写がこの物語全体を貫いている。

Too many people know you now, your private life is dwindling. You are dragged back again and again to hearings, commission meetings, secret meetings, desperate meetings, television interviews with kids from college newspapers. ... I love you, I suffer for you, I lie here in a paralysis of love, sorrow, density, idleness, lost in my love for you, my shame for having betrayed you (p. 60)

この主人公の妻は彼との出会いを夫への手紙の中で告白する。この4月のシンポジウムの後、夫婦で出席していた友人の家で開かれたパーティで主役のボストン大学からの交換教授に出会う。シンポジウムの余波が後を引き、皆が議論に熱中する中で二人は出会う。

.... and he and I wandered to the hostess's table, where food was set out. We made pigs of ourselves, eating. He picked out the shrimp and I demurely picked out tiny flakes of dough with miniature asparagus in them. Didn't you notice us? ... We talked. We ate. I could see in his bony knuckles a hunger that would never be satisfied. And I, though I think I am starving slowly to death now, I leaped upon the food as if it were a way of getting at him, of drawing him into me. We talked. We wandered around the house. (p. 65)

このようにして、二人は次の段階へと進んで行き、愛し合い、離れられない関係になって行く。彼はボストンに帰らず、そのままデトロイトの大学に職を求め、残ることになる。精神的に、また肉体的にも倦怠期に陥っている夫婦の妻に、新鮮に感じる男性の相手が出現した事になる。夫は仕事に熱中し、満足した生活を送っているの、これまでの妻の気持、空虚感には気がつかない。

この物語から読み取れる夫婦の間柄は夫婦間の意思疎

通の問題、家庭生活、夫婦生活の問題があるということである。そして、それらは希薄である。夫は仕事中心で、精神的に活動し、それによる疲労感はあるだろうが、彼自身は充実した人生を送っていると思っている。それで、家庭が安定し、妻も満足していると思い、何ら不安を感じたり、妻への特別な心配はしていない。妻の「私」が悩んだような、子供の問題も眼中には無いようだ。

このような状況で「私」は恋に落ち、体中熱く燃え、その虜になるのに時間はかからない。一夜にして、二人は夫婦の間でも話していない人生の心の傷をお互いに話す間柄となり、信頼関係を構築してしまう。それと同時に、夫への罪悪感、罪の意識は常に心から離れない。このような苦悩の中での恋、逢引である。

I say that we will have to give this up, these meetings; too much risk, shame. What about my husband, what about his wife? (A deliberate insult

I know he doesn't love his wife.) I can see at once that I've hurt him, his face shows everything, and as soon as this registers in both of us I am stunned with the injustice of what I've done to him, I must erase it, cancel it out, undo it; I caress his body in desperation.... Again and again. A pattern. (p.69)

このような不安を感じ、不倫の罪を意識し、その奥には絶望感を感じられる状況でありながら、この妻は怯まず突き進む決意を見せている。この主人公の姿勢が手紙という独白の中に、緊張感、緊迫感を与えている。この恋に命を賭ける程の執念を見せる。結果を問わず、この妻には憂えることはないという決意が見える。彼女はこの恋は時期が来ればいずれ終わると感じている。しかし、中途半端に撤退はせずに、結末は全て受け入れる覚悟が彼女にはできている。

そうして、愛の第一段階が終わると、全ての愛を払拭し、全てを破壊し、ダンスは終わると「私」は言う。さらに決して結婚などしないし、'I will die slowly in this marriage rather than come to life in another.'(p.70) と強い確信を抱いている。主人公にとって、この恋でもう一度人生を楽しくやり直す、この恋に希望を抱いているというような展望、希望のある恋ではない。彼女の夫に対する、また幾許かは相手に対する罪の意識が冒頭からこの作品に絶望感を漂わせている。結果として、この絶望感がさらにこの作品に緊張感、迫真性を与えている。

4 . 娘の存在と役割

愛する彼の娘マーシャ・カツツへの手紙は物語の二番目に早々と、そして二回書かれる。彼と最初に出会ったパーティの晩、二人でそれぞれのことを語り合った時、彼は娘の話を45分間もしゃべり続けた。そして、他の手紙の中でもしばしば言及される。冒頭の平穩無事を伝える「父母へ」の手紙の直ぐ次にこの娘への手紙がある

ということは、主人公がこの娘の存在に大きな不安、恐怖を感じていることが分かる。次の二つの引用のように、この娘が本能的に敵であり、容赦できない存在だと「私」は警戒していることが暗示される。

Dear Marsha Katz,

Thank you for the flowers, white flowers, but why that delicate hint of death, all that fragrance wasted on someone like myself who is certain to go on living? Why are you pursuing me? Why in secrecy? (I see all the letters you write to your father, don't forget; and you never mention me in them.) (p.56)

Only ten years old, and too young for evil thoughts do you look in your precocious heart and see only grit, the remains of things, a crippled shadow of a child? Do you see in all this the defeat of your Daughterliness? ... A ten-year-old cannot compete with a thirty-year-old. (p. 57)

ボストンの家を出て、デトロイトへ大学を替えた父へ娘のマーシャはたびたび手紙を出し、「私」との間でも彼はたびたびこの才能のある娘を自慢する。この娘は知能指数が高く、10歳で詩を書き、それを詩集として出版したと彼は言う。早熟で、気骨のある活発な娘であり、彼が将来を期待するが故に、このような娘を泣かせることはしたくないのが父親である。彼にとっては娘が弱点となる。存在の薄い母親はこの強気に出てくる娘の活発さを頼もしいと思って、期待していると想像される。或いは、気弱になっている母、そして父を案じて、この娘は独自の聡明さで行動していると思われる。

この娘はデトロイトにきている父と関係を持っていると知ったのか、「私」に偽名を使って死を暗示させるような白い花を送ってくるし、父親の彼にはケープコッドの浜辺で猫の死骸が見つけられる創作話を書いて来る。猫の死は今後起こりうる「自分」の死を上手く暗示していて、これで彼にインパクトを与えられるだろうという目論見と主人公は感じる。あなたは賢くて、上手だ、と「私」を感心させる。娘は父に送ってくる手紙の中で「私」のことには全く触れない。また、二つ目の短い手紙ではこの愛人にベビー服を送ってくる話がある。このように直接、間接を問わず、この娘に関することは全て「私」へのあてつけ、挑戦であると感じている。

Are you beginning to feel terror at having lost? Your father and I are not lovers, ..., still you've lost because I gather he plans on continuing the divorce proceedings, long distance, and what exactly can a child do about that...? I see all the letters you write him. No secrets. Your Cape Cod sequence was

especially charming. I like what you did with that kitten, the kitten that is found death on the beach! Ah, you clever little girl, even with your I.Q. of uncharted heights, (p.57)

このように娘への態度は辛らつである。

この娘が最終的に二人の関係に破局をもたらす。それは、この妻が夫への最後の告白、ホテルの一室で苦しんでいる中で語られる。

All this time I am sweating in the late October heat, thinking that his daughter is going to win after all, has already won. Shouldn't I just drive home and leave him, put an end to it? A bottle of aspirin was all it took. The tears I might almost shed are not tears of shame or regret but tears of anger that child has taken my lover from me. That child! (p. 73.)

娘がアスピリンを飲んだという知らせが彼のもとに入り、彼をボストンの自宅へ送るべく、「私」は空港へ車を走らせる。家のほうから彼に来たのは、娘の容態はひどくはなく、もう回復しつつあるとの知らせであったようだ。二人は空港ターミナルで別れがたい気持ちで混乱しながら、短い逢瀬を求める。彼は全て弁護士と相談し、離婚の形が整ったらすぐ帰ってくると言うが、「私」これが最後で、彼は帰ってこないだろうという諦観に達している。

女の敵は女、特にこの娘は以前から本能的に敵であり、愛の破局をもたらす危険な存在、邪悪な娘だと主人公は感じていた。彼が娘を愛しているという直接的、具体的な表現はないが、いつも自慢し、話に熱がこもることを考えれば、溺愛していることが分かる。これが彼の弱点であることは主人公には分かっていた。表面上、現在是否定しつつも、「私」は子供が欲しかったのであるが、皮肉にもその渴望した子供というものに「私」は負けてしまうことになる。真相は不明だが、娘の自殺未遂の知らせが原因でこれに彼が反応して帰宅することになる。そして彼と空港で別れた後、駐車場で車が見つからず、これがきっかけとなり、彼を失い精神的に限界に来ていた「私」は精神的混乱、錯乱に陥る。やっとの思いで空港近くのモーテルにたどり着き、部屋で一人休息を取っているところで話は終わる。つまり、この最後の窮状でこれまでのこと全てを夫に宛てて伝えようとしているところで物語は終わる。これで彼との関係を終らせようとしている。

The heat gets worse. Thirty, forty, forty-five minutes ... I have given up looking for the car...I am not lost, I am still heading home in my imagination, but I have given up looking for the car. I turn terror into logic. I ascend the stairway to the

wire-guarded overpass that leads back to the terminal, walking sensibly, and keep on walking until I come to one of the airport motels. I ask them for a room. A single. Why not? Before I can go home I must bathe, I must get the odor of this man out of me, I must clean myself. I take a room, I close the door to the room behind me; alone, I go to the bathroom and run a tubful of water.... (p.79)

そして、物語の最後で愛する、わが身を焦がした人宛に最後の手紙を書き、たった一行、一言添える。「あなたはこんなに私を幸せにしてくれました。」と。

5 . 夫婦関係と家庭生活

これまでも言及してきたが、主人公の夫は仕事中心の人間として描写されている。この物語のテーマである既婚の女性が不倫の恋に至るまでの結婚8年間のことはあまり触れられていない。その中で、彼女が結婚生活で悩んだと言えるものは子供の存在についてである。彼女の家庭生活と子供、夫婦間の関係についてはどうであろうか。

夫グレッグが家庭生活に何の憂いも感じていないのとは対照的にこの主人公「私」は孤独な、寂しい妻の座を表している。その端的な原因は子供の不在である。この妻は子供のことでは大分悩んだようであるが、この不倫を犯す頃はそのことは遠い過去の問題だったと述べている。しかし、この子供の問題はこの妻の現在の状況を作る大きな要因であることを忘れてはならないだろう。「父と母へ」の手紙の中で、夫の友人の息子が問題を起こしたことに言及しつつ、彼女は子供の存在に関して次のように言う。

Do you remember any of us? I am your daughter. Do you regret having had a daughter? I do not regret having no children, not now. Children, more children, children upon children, protoplasm upon protoplasm Once I thought I couldn't bear to live without having children, now I can't bear to live at all. I must be the wife of a man I can't have, I don't even want children from him. (p. 70-1)

そうして、もう一度子供のいないことを後悔していないと言い、自分を生んでもらったことを感謝していないと両親に告げる。親に'No gratitude in me, nothing. No, I feel no gratitude. I can't feel gratitude.' (p.71)と言うのは、自分は幸せな人生を歩んでいないと述べていることになる。そして、これは彼女にとって悲しいことである。自分の人生に意味を見出せない状況にあるのは、新たな男性と不倫を犯したからではなく、既に夫婦の間でこの妻は希望の無い閉鎖された状況にあったということである。そこに現れた男性はそのきっかけに過ぎない。子供

がいれば全てが解決するとは言えないが、子供はこの夫婦二人だけの間の意思疎通の大きな共通の話題になったであろう。この妻は子供のいる家庭を望んでいたようであったが、いつの間にか夫婦の話題には上らないようになってしまった。

この妻と夫との夫婦関係が希薄で、意思疎通ができていないことは「私」の父母への手紙の中で語られる。父母への手紙は日常的で平穩を装い、あまり意味の無い部分が多いが、夫へ伝えにくい内容を語り、間接的に夫婦関係を説明している。

I am surviving at half-tempo. A crippled waltz tempo. It is only my faith in the flimsiness of love that keeps me going I know this will end. I've been waiting for it to end since April, having faith. Love can't last. Even lust can't last. I loved my husband and now I do not love him, we never sleep together, that's through. Since he isn't likely to tell you that, I will. (p.70)

ここに暗いイメージの言葉が並び、夫とは冷え切った状態で、夫婦関係の希薄さが表れている。彼女も不倫の恋に安住しているわけではなく、絶望の淵を歩んでいることが分かる。さらにこの引用の後に、'My body has no life in it, only its own. What you discharged in me is not life but despair.'(p. 63) と言う。この描写には絶望感が漂っていて、恐怖感を与える描写になっている。

彼のほうの夫婦関係は直接言及されることはないが、「私」との睦言で、もう妻を愛してはいないと言ったようである。それを「カツ婦人へ」の手紙で述べている。睦言の全てを信じるわけにはいかないが、彼にも妻を裏切るだけの隙間があることは確かである。

このような孤独と絶望感の中で、彼女は無意識に、また自然にこの新しい恋に僅かな活路を見出す。グレッグ・ジョンソンはこの主人公を「不倫の愛に充足感を求めるタイプの女性」に分類しているが、何ら精神的満足感、安心感といった描写は無いので、あり得るのは束の間の性的充足感のみであろう。³そして夢を与えてくれるものへと身を委ねていくのである。これは彼女自身大きな代償を覚悟の上での希望のない束の間の逃避である。

6 . 手紙の技法と効果

手紙は関係者 夫、愛した相手、彼の妻、彼の娘に対しての手紙、心の独白という形式の物語であるが、それ以外には両親へ3回、編集者へ1回手紙が書かれる。両親へは形式的な他愛も無い手紙のようであるが、実際には苦悩をにじませた遣る瀬無い状況で書かれていることは既に述べた。両親には最後の行き詰まった状況で現在の現在に至る夫婦関係を理解してもらおうとしている。また、編集者への手紙は読んでいて多少違和感を覚える。夫と恋人に絡め、男性の性的な問題について個人的な感

想、悩みを第三者に尋ねている場面である。これは誰にも質問できないので、編集者に尋ねている。或る夜、彼と別れホテルから出てくると、彼女を凝視する路上の黒人男性達の視線に生き生きとした性的な力を感じる場面がある。なぜ夫や自分の恋人にこのような新鮮さ、生気が無いのかと。これと敢えて夫とは別の道を行っても構わないとする態度に、フリードマンはフロイトの説を引用して適切に解釈している。⁴即ちオーツには「我の本能は死の本能、性的本能は生の本能と同義である。」と同等の考えがあると。

このように、日記や手紙の形式は主人公の独白、告白に適した技法であり、主人公の心理、苦悩の吐露には効果的な方法である。また通常の形式で相手に考えを伝えることが不可能の場合の方法である。この形式で主人公自身が理路整然と普通の心境で相手にものを伝えられない悩みをそのまま赤裸々な状態で吐露している。それが結果として読者には迫真性、緊張感を持って伝わる効果的な方法となっている。この物語の「編集者へ」は物語全体の設定が判然としない部分があるが、主人公の苦悩を投げつける相手として関係者以外がこの「編集者へ」であろう。自分中心の日記形式よりは相手を意識した手紙の形式のほうが、さらにこのオーツの「書かれない、投函されない」手紙の形式のほうが自分と相手両方を意識し、一層混乱した苦悩、心情を吐露するのに適している。オーツの小説の技法における実験的な面が見られる。⁵

この心の手紙は読まれるという前提条件が弱くなるわけで、理性的ではなくなり、感情的、情緒的になるので、主人公の混沌とした心理状況が描写できるという利点がある。この「編集者へ」の部分では、この妻の精神と肉体の分離、離反さえ示し、精神的な死、そして肉体的な欲望の果て 絶望さえ暗示している。

この物語は、恋人ができたこと、それにより夫を裏切っていることを自分の実生活に織り交ぜながら、自分の罪の意識、苦悩を語る。この関係者に向けた手紙という形式が主人公の混乱した内面、心理を語るのに効果的である。次の「娘マーシャ・カツツへ」の手紙もその一例である。

Dear Marsha Katz,

Thank you for the baby clothes. Keep sending me things, test your imagination. I feel that you are drowning. I sense a tightness in your chest, your throat. Are your eyes leaden with defeat, you ten-year-old wonder? How many lives do children relive at the moment of death? (p. 62)

この短い手紙でさえ相手の娘に皮肉を言いつつ、実は逃げ場の無い自分の心情、苦悩、さらには窮状を吐露している。ここで使用されている drown, defeat, death という言葉は相手に投げつけている言葉であるが、実は自分に返ってくる言葉であることを彼女は無意識ながら感じ

取っている。娘に対するこの嫌みな言葉、非難も実は自分自身の切羽詰った感情の裏返しである。

もう一つの手紙の形式としては、上の娘への引用に続く両親への手紙である。それは、次のように始まる日常の定型文であるが、日常の情報は空欄である。

Dear Mother and Father,

The temperature today is _____. Yesterday at this time, _____. Greg has been very busy as usual with _____, _____. This weekend we must see the _____'s, whom you have met. How is the weather there? How is your vacation? Thank you for your postcard from _____. (p.62)

このブランクは決まりきったことも定まらない不安、或いは破綻した家庭の日常を伝える空しさを表している。そうして、この引用の後に夫が仕事の話をも勢い良く続け、混沌が待っているとも知らない仕事熱心で、善良な夫へ妻は心で別れを告げている。

以上のように、通常で考える手紙ではないが、宛名を書き、相手に対して自分の心情を伝えるこの「手紙」の形式は理性で抑制を効かせずに、悩みや心情をそのまま訴え、吐露する点で効果的である。

7. 結論

これまでこの作品のストーリーを概観しつつ、孤独な人妻の男性との出会い、不倫の愛、夫婦関係、子供の存在と家庭生活などの点からこの作品を考察した。この主人公「私」である妻にとっての不倫の愛は絶望の淵に現れ、偶然芽生えた一抹の活路と言えよう。カツツ教授との出会い以前から既にこの「私」にとっての人生、家庭生活は代わり映えの無い、夢や希望の絶えた生活であった。あとは機会、きっかけを待つだけの状況であったのだ。無論、決してその不義を意図的に犯すということは作風上も、主人公の行動からも感じられない。出会いは自然であるが、二人の愛が燃え上がると共に、この妻には身も心も焼き尽くすような勢い、覚悟ができてくる。

このように、この人妻には運命的、宿命的な末路が物語の当初から暗示される。不倫の愛、不義が夫への裏切り行為となり、何も知らない夫への罪の意識に苦悩する。しかし、夫とはただ生活を共にするだけの存在となっている。彼女にはこのままの人生を生きるくらいならとの覚悟があり、この不義がたとえ夫を失い、また愛する彼と別れる結末になろうと自分は最後まで突き進もうという原動力となっている。この結末を考えない深い絶望感が物語全体を覆っている。これはしばしばオーツに見られる形式であるが、無論、設定、技法は微妙に違い、ここではこの書かれない手紙の技法が一層効果的である。

最後の9ページにも及ぶ夫への手紙は愛人との空港での別れの場面を描写しているが、別れの後の彼女の精神

的混乱、孤独を全て夫に伝えようとしている点で一層辛辣で、混乱の中にも鬼気迫るものがある。絶望の中にも、全てを受け入れる諦念、心の平静さというものがある。この作品は手紙という技法を使い、その中での苦悩の吐露、独白、精神的混乱が効果的に表現されている。日常の平穏を両親へ伝える出だしから始まり、空港での別れとモートルの一室での孤独へと物語が展開し、静から動、そして静へと、主人公が半ば予想された自分の末路を必死に見つめようとしている姿が効果的に描写されている。

注)

- 1 . 拙論「オーツの *The Wheel of Love* 研究 ()」(『都立高専研究報告』、第 39 号、2003)pp. 127-38. を参照。或いは、*The Wheel of Love* の作品に関する拙論『都立産技高専研究報告』第 36 号、38 号、41 号を参照。
- 2 . Joyce Carol Oates, *The Wheel of Love* (Vanguard, 1970). 以後、本文中のテキストからの引用は全て括弧にページ数で示す。
- 3 . Greg Johnson, *Understanding Joyce Carol Oates* (South Carolina, 1987)pp.10-11. ジョンソンはこの記述の前後でオーツの主人公を主に 6 つのタイプに分類している。
- 4 . Ellen G. Friedman, *Joyce Carol Oates* (Frederick Ungar Publishing Co., 1980) p. 216.
- 5 . Greg Johnson, pp. 12-3. を参照。直接この技法に言及しているわけではないが、オーツが絶えず技法の工夫、実験をしていることが分かる。